ヴァイキングにみる死生観

Viking View of Life and Death

ネットワーク情報学部　佐竹 弘靖
School of Network and Information　Hiroyasu SATAKE

Keywords : viking, symbol, Norse ship

ギリシャ語の「割符」という意味を持つ言葉を語源とする「シンボル（訳して「象徴」）」は、人類の想像力・抽象力の究極の形であるといわれている。神話や伝説、宗教や美術に使用されるにとどまらず、現代でもあらゆる表現活動のなかに多様なジャンルを取り込みながら使われている。

シンボル（以下「象徴」と書く）とは、ラスマッセンが述べているように「論理学的というより美学的なものであり、個人的というよりは文化的であり、科学的というよりは想像的である」とする立場が重要で、つまり、「与えられたもの、解釈されるべきもの」と位置づけるべき内容を含んでいるものと理解できよう。

よりかみ砕いて語るならば、象徴とは、人間の内面的な感情や思考が外面的に投射されたイメージなのである。たとえば、「死」や「再生」への概念や観念は個人の意識を超越しているため、表面化することがきわめて困難である。したがって、そこに象徴という、いわば別な形のものを具現化することによって伝えようとする手段が生み出されてくるのである。象徴とは、目に見えないものを目に見える形として表現される「記号」だと思えばよいのだ。

あらゆる古代文明において象徴はそれこそ百人百様の姿で描写されてきた。千年もの昔、突如として出現したヴァイキングの世界においてもしかりだ。ヴァイキングにとっての象徴は「船」が代表しているのはよく知られたところ。なぜ、人間内部の葛藤や実体を明らかにし、次いで認識にいたる手段としての象徴に「船」が取り上げられたのであろうか。その疑問を解き明かすことにより、当時の文化的背景や固有の世界観、はたまた意識下に芽生えた身体観にも何らかの解答が見出せそうである。

まずは、ヴァイキング時代における船の様子を眺めていかなければならない。

ヴァイキングの原型ともいえる初期のスカンジナヴィアの船の実態については正確な知識を得ることはほとんど不可能に近い。というのも、当時の情報として入手できるのは、数少ないしかも不鮮明な岩面線刻画だけだからだ。B. アルムグレンによるとこれらの線刻画のうち最古のものはノルウェー北部の石器時代に描かれたと推測される線刻画で、それはエスキモーのボート《ウミアク（皮舟）》に類似していて、獣皮張りの小舟と考えられているそうだ。そのうち、青銅器時代になっていくにともない、船の世界が飛躍的に発展していくのである。もちろん、この説には反論も出されている。つまり、青銅器時代の小舟はもともと丸木舟で、それに薄板や厚板をつぎつぎと取り付けていったというのだ。いずれにしろ、誕生直後のスカンジナヴィアの船は小規模で品質の良くないものであったことは間違いない。

その後、ヴァイキング時代到来までの間に、いわゆるスカンジナヴィア船は5種類の形式を持つまでになってくる。時代でいうならば、紀元前300年頃から紀元1000年頃までのことである。

船の形状を詳細に説明するのは他に委ねざるを得ないが、紀元前300年頃に建造された船で全長13m、次の段階ではスカンジナヴィア船（ユトランド半島南部フレンスブルゲル・フィヨルド岸のニュダムから出土）も巨大で全長23m以上、また三段階目になる船クヴァルソン型船も全長18.5mとすべての段階で大規模な構造に設定されていることに注目しなければならないだろう。

その後、ヴァイキング時代になってからも船体の大部分は、それまでの建造技術を受け継いでいくことになるのだが、機能的には当然多様な工夫がなされ、より実用的になってくるのは船の形状にまつわる変遷を見れば明らかとなる。と同時に、一隻の船を完成させるまでに行われる作業はそれまで以上に分化されることになり、かなり大人数の手が必要となってこよう。ここでヴァイキング時代の造船所の様子をB. アルムグレンが克明に紹介しているので掲載しておこう。

斧を振り上げた中央部の船大工は、丸太を割って厚板を切り出そうとしているところ。彼の左手では、出来上がった厚板が加工されている。この厚板は、肋材間の長さと相当する間隔で、もともとの厚みを保っている。左手の船底では、クリートがのみで刻まれ、ひざまずいた船大工がそれを肋材と結びつけるための穴をあけている。一方、船首の手前にいる大工は、鉄製の削器で厚板の装飾を施す作業中。船の内側や周囲にいる他の大工たちは、身を屈めながら厚板の形を整えているが、この仕上がりのために、彼らは簡単な締め具を用いたり、厚板自体を下側の厚板とリベットで留めたりする。

なにはともあれ、十分な人手を確保し彼らを指揮する指導者の能力や財力が重要な意味をもつようになってきたのは想像に難くない。造船により社会的組織が確立していったのである。

そうなると船に対する民衆の意識にも少なからずの変化が生じてきたのは容易に想像できようというものだ。

それまで日常生活に必要な漁のために作られていた船が、財力に物を言わせて建造される対象となり、いわゆる権力の象徴として理解されるようになってきたのである。

それだけではない。

大型船の発達により、遠距離航海が可能となったヴァイキングたちにとって交易範囲が大幅に拡大したのにくわえ、航海技術も自ずと育成されたのであろう。世に言う“海賊”としてのヴァイキングが荒れ狂う海の男として跋扈し始めたのは歴史が雄弁に語ってくれる。いうまでもないことだが、戦利品は住み慣れた故郷へ持ち帰り、生活を豊かにしてくれる。「船」のおかげで生活ができるとなるとそこにある種の信仰心が芽生えてきてもおかしくはないだろう。

船を神格化するとともに、ヴァイキングの象徴になる第一歩がこの時点で踏み出されたといっても過言ではない。

それを証明するかのように、ヴァイキング船が多数建造され始めた頃から、民衆の生活様式も変化の兆しを見せはじめている。

まずは、住居から見ることにしよう。

デンマークはシェラン島最西端に位置する住宅街のはずれにヴァイキング遺跡でも有数のトレレボルゥ遺跡が広がっている。今では羊が放牧されるだけの大平原といった感さえするが、この地は優れた規格のもと見事に仕上げられた当時の要塞地として名高いのである。その一角に要塞警備にあたる家族が住んでいたのであろうか、住居が復元されて建てられている。

その家屋の形態がきわめて独創的であり、船が象徴化されたもっともよい具体例であろう。トレレボルゥに遺るその住居は、ヴァイキング船の形状を上手に利用しているのだ。船形家屋（ナウスト）と呼ばれるこの住居は、ちょうど船を逆さまにひっくり返し、船底部分が屋根になるような構造になっている。また、住居内の中央には広いオープン・スペースをもたせる現実的な要請も見事に現実化した理想的な住居といえよう。

いや、その家屋内に入ってみると、まるで自分が船内にいるかのような錯覚に見舞われるほど、「船」を意識して建てられていると感じるのは私だけではあるまい。ヴァイキングたちは船に抱かれて寝食を共にし、船とともに生を全うしようと考えたのではないだろうか。ヴァイキングたちの精神上の姿勢が顕著に示された事物のひとつである。

さらに、ヴァイキングたちは今を生きる空間を船で象ったばかりでなく、死後の世界もやはり船に頼っていた。それは死者が埋葬されている墓を見れば一目瞭然なのだ。

細長いフィヨルドに沿って発達した北ユトランド最大の街オールボーにありなだらかなリンホルムの丘一面に、ヴァイキングたちは眠ってる。所狭しと並べられたその墓地は、一見何の変哲もなく荒れ果てた訪れる者もまったくないと思われる場所と感じる。ただ雑草に埋もれた大小さまざまな石が故人の居場所を教えてくれるばかりだが、足を墓に近づけていくと、それが船を象ったものであることに気づかされる。ヴァイキングたちは死者一人ずつに一隻の石の船を作ってその中に埋葬する習慣を続けていたのである。

死者が石の船に乗ってあの世の大海原を無事に渡りきってくれるよう願ったのか、それとも故人の生前の海の勇者ぶりを後世に伝えようとしたのか、ここでも「死」を表現する象徴が船でなければならなかったのだ。

ほかにも、ノルウェーのオスロで発掘された船本体を墓とする「墓船」はヴァイキング遺跡跡地に建設された博物館で実際に目にできるわけで、その瞬間、だれもが古人の英知にただ脱帽するにちがいない。

北欧世界とくにヴァイキング時代における象徴（シンボル）としての船は、生活に密着していたからこそ生まれ出た概念であるのは言うまでもないことだ。しかしながら、船が象徴として確固たる地位を手にするまでには、当然のことながら歴史的変遷のなか紆余曲折があった史実を我々は忘れてはならないであろう。

沿岸部においての生態学的見地から論じられる船の必要性が象徴化の原初的形態とするならば、ヴァイキング以前の力や社会的地位、さらには集団から与えられる指導者の表象が、第二段階であり、最終的にはそれらすべての文化的そして歴史的背景を踏まえたうえで神格化された船が、ヴァイキングたちの内面的な感情や思考を外面に投射された象徴（シンボル）となったといえよう。「生」と「死」という言葉では言い表せない概念を、“船”で象徴したヴァイキングたちは、自らの身体はもとより空間や時間をも船と同化させようとしたにちがいない。

自己の肉体は船そのものなのである。

象徴としての肉体、それは象徴としての船と言い換えることができる。それがヴァイキングの世界なのだ。

ネットワーク情報学部設立に奔走された高津先生がご逝去された。日々のご苦労を目にするごとに先生のご健康を案じていたものである。今、天国で安らかにお休みのことと思う。ご冥福を心よりお祈りする。

—参考・引用文献—

International Research Seminar “The Ship as Symbol” PNM Copenhagen 1995

Steen Wulff Andersen “The Viking Fortress of Trelleborg” Museet ved Trelleborg 1996

水之江有一著「図像学辞典」岩崎美術社、1991年